ダイ・リャム族の住まいにおける空間認識と行動から見いだされる空間的秩序

中国雲南省思茅地区孟連ダイ族ラフ族ワ族自治県孟馬鎮マンボン(芒蚌)の場合

A STUDY ON THE ORDER OF SPACE WHICH HAS CREATED DWELLINGS OF
DAI RYAM MINORITY AS DEFINED BY THEIR WAY OF SPATIAL RECOGNITION
AND BEHAVIOR IN THEIR DWELLING LIFEThe case of Man Pong village in the Menglian Dai nationality Lafu nationality
Va nationality Autonomous Prefecture, Yunnan Province, China谷内 麻里子*¹, 塩谷 壽翁*², 富樫 穎*³

Mariko TANIUCHI, Toshio SHIOTANI and Satoshi TOGASHI

The purpose of this study is to understand tradition and change of dwellings and dwelling life of Dai Ryam Minority living in Menglian Prefecture in the Yunnan Province and explore for the way of people's response to space and pursue an order of space creating dwellings and the tendency of its change in recent years.

In this paper, we understand how the housing aspect of dwellings of Dai Ryam Minority is to evolve by partly surmising. In addition, we will understand the way of recognizing space and the way of behaviors of the people in special occasions as well as in everyday matters and find out the concept of the way of their recognizing space. By so doing, we will explain the order which creates structure of space of dwellings, and pursue how such an order is to change.

The order of space which has created dwellings in respect of the succeeded and maintained dwellings is changing. It is reflected in the change in people's response to space in everyday matters. No major change has, however, been seen in the way of behaviors in special occasions, which has been maintained to the present time.

Dwellings of Dai Ryam Minority are made by putting a greater emphasis on the aspect of special occasions despite the change in the meaning of the aspect of succeeded everyday matters.

Keywords : minority people, dwelling culture, behavioral patterns, sense of space, symbolism of dwellings

少数民族, 住文化, 行動のしかた, 空間感覚, 住まいのシンボリズム

1 この研究の目的と本稿の内容・方法

本稿は、ダイ・リャム族¹⁾の住まいおよび住生活の継承と変化をとらえ、人びとの空間に対する反応のしかたをさぐり、住まいをつくりだしている空間的な秩序、すなわち住まいの空間的な組み立てをつくりだす枠組みを説明して、近年におけるその変化の傾向を追究しようとするものである。

人びとの空間に対する感覚的な反応は、住まいにひとつの空間的な秩序をつくりあげる作用をもつ。そのような感覚的な反応は、具体的には、空間認識のしかた、行動のしかた²⁾などの現象として現われる。これらの住生活の表面に現われる現象から、人びとの感覚的な反応は間接的に知ることができる。

この見方は、先行する研究³⁾に負うところが多い。その延長上に、これまでに、いくつかのシップソーンバンナーの高床系の住まいに居住する少数民族の住まいのフィールドワーク⁴⁾をおこなって、住まいの空間的な秩序の追究を試みている⁵⁾。

筆者らは、2000年8月から9月と2001年8月から9月に、中国雲南省思茅地区孟連ダイ族ラフ族ワ族自治県孟馬鎮マンボン(芒蚌)でダイ・リャム族の住まいを調査している(以下、マンボン調査)⁶⁾。

本稿では、マンボン(芒蚌)の住まい(全106戸のうち15戸を詳細に調査、以下、調査住居)に現われる傾向を事例的に述べる。

本稿では、調査住居の共時的な比較と複数のムラ人からの聞き取り⁷⁾をもとにして、①ダイ・リャム族の住まいの居住面⁸⁾がどのように展開しようとしているのかを、一部に推測を加えてとらえる。また②日常生活および非日常生活における人びとの空間認識のしかたと行動のしかたが居住面の構成の展開とどのように関係しているのかとらえて、人びとの空間認識のしかたについての概念(以下、空間概念)とその展開の傾向を見いだす。これより、住まいの空間的な構成をつくりだしている秩序を説明して、そのような秩序がどのように変わろうとしているのかを追究する。

本稿の記述は、調査住居の共時的な比較とそこから読み取れる展開の方向に限定するものである。住まいをつくりだしている空間的な秩序の今後の変化の傾向の推測は、さらに調査を継続して重ねたうえで報告したい。

本稿で取る方法は次のようである。

(i) 住まいの内部と外部の居住面をどのように認識しているのかを、人びとが認識している場(以下、認識領域)をあらわす呼び名

*¹ 大阪工業大学大学院工学研究科博士前期課程 大学院生*² 大阪工業大学工学部建築学科 教授・学博*³ 大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授・工博

Graduate Student, Dept. of Architecture, Osaka Institute of Technology

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Osaka Institute of Technology, Ph. D.

Prof., Graduate School of Human Life Science, Osaka City Univ., Dr. Eng.

から読み取る。そのうえで認識領域をあらわす呼び名に含まれる空間概念をとらえる。また、空間の認識をあらわす言葉（以下、認識語彙）の存在を確かめて、語彙に含まれる空間概念をとらえる。

(ii) 人びとの日常生活における行動のしかた、非日常生活における行動のしかたに含まれる空間概念を読み取る。それは居住面でおこなわれる人びとの行動の場を確かめて、男と女、世代の間、家族と外来者の間の相対的な位置関係に、どのような空間概念が存在するのかをさぐるものである。

これまですでにダイ・リャム族の住まいは研究されている。それは中国雲南省思茅地区孟連県のダイ・リャム族の「伝統的」な住居を取りあげるものである（以下、既研究）⁹⁾。本稿で対象にするダイ・リャム族とはフィールドは異なるけれど、ダイ・リャム族の「伝統的」な住まいの空間構成とその意味についての考察には、参照すべきところは多い。筆者らの知るかぎりにおいて、このほかダイ・リャム族の住まいを取りあげる研究はみられない。

住まいおよび住生活の継承と近年の変化に視点をおいて、住まいをつくりだしている空間的な秩序とその変化を追究する分野は未開拓といっている。本稿は、調査をおこなう上での様々な制約から少数事例の比較分析に留まるものであるが、ダイ・リャム族の住まいの空間的な秩序を説明する研究に端緒を開く意義をもつのではないかと筆者らは考えている。

2 居住面の構成とその展開（図1、図2）

ダイ・リャム族の住まいは高床である。人びとが生活するおもな居住面は高床の上階にある。複数の聞き取り¹⁰⁾および既研究を参照して確かめることができる、これまでに保たれ継承されてきた住まい（図1、型1の住まい）の居住面は、「おおきな部屋」¹¹⁾、ナホン、半外部空間としてのホンノ、ヌーツァン（露台）、ヌホン（踊り場）からできている。内部空間は「おおきな部屋」とナホンとに分節しているにすぎない。しかしながら、このような居住面の構成の住まいは、マンボンには残っていない。

もともとダイ・リャム族の住まいは木造であるが、近年（およそ1990年以後）に建築される住まいに、地上階を壁で囲む木造の軸組に煉瓦を積むもの（図1、型5の一部と型6の住まい）が現れている（マンボンの住まい全106戸のうち69戸、65.1%）。いずれの住まいも地上階はおもに家畜・家禽の飼育の場であり、農機具が置かれる。

調査住居の共時的な比較によれば、いずれの住まいでも「おおきな部屋」を住まいの中心に置く居住面の構成は保たれている。また「おおきな部屋」に隣りあって分節するナホンの部分は違っていない。居住面の構成で違っているのは、囲炉裏タオファイの置かれるフンファイの部分と半外部空間ホンノの部分とである。

一見すると多様に展開しているように見える調査住居の居住面の構成は、ホンノが「おおきな部屋」に取り込まれる、囲炉裏タオファイおよびその周辺が認識領域フンファイとなって「おおきな部屋」から分節する展開から説明できる。それは次のようである。

(i) 居住面の構成は、半外部空間としてのホンノが、住まいの内部の空間として取り込まれるように展開している。この展開は、ダイ・リャム族の住生活が内部空間でおこなわれるようになる変化の現れと解釈することができる。

内部空間となったホンノの部分は、①内部に取り込まれても、呼び名はかわらずに一つの認識領域ホンノとして認識されるもの（図1、型2の住まい）と、②「おおきな部屋」と一体となり、認識領域として保たれていた呼び名は消滅するもの（同、型3の住まい）とが並存する。近年に更新される住まいでは、廊下状の部分にホンノの呼び名は残る（同、型4、型6の住まい）。

(ii) 「おおきな部屋」の中心におかれていた囲炉裏タオファイとその周辺の部分は、①「おおきな部屋」にひとつの認識領域フンファイ（フンは部屋、ファイは火の意）をつくるように分化する（同、型3、型4の住まい）。人びとは「おおきな部屋」の火を扱う部分を他の部分とは分けるように認識するようになる。またさらに、②「おおきな部屋」とは独立する部屋として分節するようになる（同、型5、型6の住まい）。これは食事、炊事調理などの

図1 居住面（高床の上階）の構成と推測できる展開

図2 住まいの実例 (高床の上階をしめず)
 D3、D4、D5、D6、D7: 調査住居番号
 型2、型3、型4、型5、型6: 居住面の構成の型
 (図1参照)

場を、外来者から隔離しようとする展開と考えることができる。

3 空間認識のしかたから見いだされる空間概念

3-1 保たれてきた空間認識と空間概念 (図3、図4)

調査住居のなかで、これまでに保たれ継承されてきた形態を最も留めているとみられるのは型2の住まいである。ここでは型2の住まいでの空間認識のしかたに複数の聞き取り¹²⁾で得られた結果を併せて、ダイ・リャム族に保たれてきた空間認識のしかたとそこから見いだされる空間概念を推測する。

(i) 「おきな部屋」には、人びとが認識するいくつかの認識領域の呼び名が存在する。認識領域は、「おきな部屋」のガンフン (ガンは中心、フンは家とか部屋の意味) と囲炉裏タオファイの周辺のヌシー (ヌは上、シーは場)、同居する家族の守護霊デウワ (尊称はヒャー) の「依り代」¹³⁾のあるサオデウワ (デウワの「依り代」のある柱、サオは柱の意味) の前のホンデウワ (ホンは場の意) である。

(ii) 人びとは山がある集落の北側をホーワン (ホーは頭、ワンはムラの意)、その反対側の南側をハンワン (ハンは尻尾の意) と呼ぶ。人びとはムラを動物の比喩で理解している。山側ホーワンは上位の側タンヌー (タンは側、ヌーは上の意)、山とは反対の側ハンワンは下位の側タンタイ (タイは下の意) と呼ばれる。

ヌシーは、「おきな部屋」の山側ホーワン、つまり上位の側タンヌーにある認識領域であり、「おきな部屋」ではほかの部分とは違った特別な場として認識されている。またガンフンは、囲炉裏タオファイをはさんでヌシーとは反対の側にある下位の側タンタイの認識領域である。

ふたつの認識領域ヌシーとガンフンとの間には、上位の側と下位の側という空間概念が存在する。これは集落の上位の側タンヌーと下位の側タンタイの方向と重なっている。

(iii) 住まいには、囲炉裏を中心とする認識のしかたが存在している。「おきな部屋」の囲炉裏タオファイを住まいの中心に置く認識のしかたである。

これまでに保たれ継承されてきたとみられる居住面の構成からは、ダイ・リャム族の日常生活における行動は「おきな部屋」の囲炉裏タオファイの周辺、とくにガンフンでおこなわれていたものと考えられる。

日常的に人びとは囲炉裏を中心において行動してきた。それよりもまして、囲炉裏は心的な中心を象徴する存在であったと考えられる。それはいくつかの儀礼における人びとの行動のしかたから説明できる¹⁴⁾。このような囲炉裏とその周辺に受けつがれてきた意味は、プツァン (司祭) からの聞き取りによると、次第に失われつつあるようである。

(iv) 「おきな部屋」をタンロン (タンは側、ロンは主の意)、ナホンをタンノイ (ノイは主に対して従なるものをあらわす言葉) と呼ぶ二元的に対立する認識語彙が存在する。

これより二つに分節する内部空間の間に、「おきな部屋」を主とし、奥まったナホンを従とする空間概念が読みとれる。ダイ・リャム族は、「おきな部屋」を住まいの中心に位置づけるように認識している。

(v) 半外部空間としてのホンノ (ホンは場・部屋・家などの空間をあらわす言葉、この場合は場、ノは外の意)、「おきな部屋」のガンフ

図3 これまでに保たれてきた空間概念（認識語彙と認識領域をあらわす呼び名から読み取れる空間概念）

図4 これまでに保たれてきた集落における空間認識と空間概念

ン（ガンは中心、フンは家の意）、奥まった部屋ナホン（ナは内、ホンは家の意）は、それぞれ外、中心、内を意味する言葉を含んでいる。これより外部から内部に向けて、住まいはおおきく三つの部分に分けて認識されていることがわかる。この認識のしかたは既研究でも見いだされている¹⁵⁾。

(vi) ナホンの内部のサオデュワに近い側はホンロン、これと反対側はホンションと呼ばれる。ホンロンは主となる場、ホンションは従となる場を意味している言葉である。この認識語彙からはデュワに關係する主と従の空間概念が存在していることがわかる。

ダイ・リヤム族の住まいには、すでに述べている山側ホーワンを

図5 居住面の展開と上位・下位の空間概念

上位の側タンヌー、山とは反対の側ハンワンを下位の側タンタイとする空間認識のしかたと、家の守護霊デュワに關係する空間認識のしかたとが重層的に存在している。

(vii) 高床の上階はガンフン、上階の梁から上の小屋裏はヌハー（ヌーは上の意）またはヌソン（ソンは高いの意）と呼ばれる。また地上階はタ（ン）トゥン（下の側、トゥンは下の意）などと呼ばれる。通常はヌハーに昇ることは禁じられている。また触ることも禁じられている（男だけが昇ることを許されている住まいもある）。住まいは、梁から上の部分、居住面となる上階、地上階の三つの部分に分けて認識されている。

3-2 空間概念の継承と変化（図5）

調査住居の共時的な比較から空間認識のしかたの展開を述べ、空間概念の継承と変化を読み取る。

(i) ヌシーは囲炉裏タオフィアの上位の側タンヌーに位置する特別な場として認識されてきた。このヌシーの意味は、タオフィアとその周辺の部分が、「おおきな部屋」のなかで一つの認識領域となる住まいと、「おおきな部屋」とは分節する部屋に移る住まいとは違っている。また認識領域ヌシーが消滅する住まいもある。

タオフィアがガンフンから移行してもヌシーはもとの「おおきな部屋」のタンヌーの位置に留まる住まいがある。またヌシーが、「おおきな部屋」から新たに認識領域となるフンファイや分節されたフンファイに移る住まいがある。

前者の住まいのヌシーは本来の意味を失って、認識領域として残るだけの存在になっている。これは後に取りあげる行動のしかたから実証できる。後者の住まいのヌシーの位置は、タンヌー（上位の側、山側）ではなく、部屋の奥まった位置がえらばれる。しかしヌシーを特別な場とする認識のしかたは残る。

(ii) ヌシーとガンフンとの間に存在する上位の側タンヌー、下位の側タンタイという空間概念は、居住面の展開によって、認識領域フンファイができる住まいとフンファイが「おおきな部屋」から分節する住まいとは、違った認識領域の間に存在するようになる。

前者の住まいでは、「おおきな部屋」のもとからある部分はタンヌーとなり、新たにできる認識領域フンファイはタンタイとなる。後者の住まいでは、「おおきな部屋」はタンヌー、分節したフンファイはタンタイとなる。

保たれてきた囲炉裏タオフィアをランドマークにして分かれる上位の側、下位の側の空間概念は、認識領域の間や部屋の間に存在するものとなる。それはフンファイの部分の分化・分節する居住面の

図6 日常生活（食事と炊事調理、休息およびくつろぎ、外来者の対応）における行動のしかた

展開に結びついている。しかしながら、集落の山側を上位の側タンヌー、その反対側を下位の側タンタイとする空間認識の方向性は保たれている。

(iii) ヌシー、ガンフンなどの認識領域の拡がり、住まいのあいだで個別的である。ホンデュワラは、ダイ・リャム族の人びとの精霊信仰と小乗仏教の信仰の場となる認識領域であり、調査住居のすべてに保たれている。

4 行動のしかたと空間概念

4-1 日常生活における行動のしかたと空間概念（図6）

日常生活における行動のしかたとその展開を、調査住居を共時的に比較して述べる。またそこから見いだされる空間概念とその展開を述べる。

(i) もともと炊事調理は、火を使う過程の行為は「おきな部屋」のタオフィイの下位の側タンタイのガンフンでおこない、水を使う過程の行為は露台ヌーツァンでおこなうものであった。

このような炊事調理の場は、「おきな部屋」に認識領域フンファイが生じる住まいと、フンファイが「おきな部屋」から空間的に分節する住まいでは違っている。火を使う過程の行為は、ガンフンから新たなフンファイに移っておこなわれるようになる。いっぽう水を使う過程の行為は、すべての調査住居とも露台ヌーツァンでおこなわれている。

食事は、型2の住まいでの行動のしかたから推測すると、もともとはタオフィイのガンフン寄りの場でおこなわれていて、食事の場

面で男女の行動の場は分けられていたと推測できる。しかしながら調査住居の大部分では、食事は、炊事調理とおなじように、認識領域フンファイや分節されたフンファイでおこなわれている。またとくに男女、老若で坐がきまるということはない。

調査住居には、炊事調理および食事の行動の場をガンフンから分けようとする傾向が現れている。これより、近年にダイ・リャム族の住まいでは、炊事調理や食事を家族にとってウチ向きの生活とする概念の形成が進んでいると考えことはできる。

(ii) 休息およびくつろぎの行動は、おもに「おきな部屋」のガンフンでおこなわれる。フンファイには移らない。

休息およびくつろぎの行動は、もともとは囲炉裏タオフィイの周辺でおこなわれるものであった。休息およびくつろぎの場面で、タオフィイの上位の側タンヌーのヌシーは一家の主人など男が使う場である。女はタオフィイの下位の側タンタイのガンフンを使う。

認識領域フンファイが生じたり、フンファイが「おきな部屋」から分節し

て、囲炉裏タオフィイがフンファイに移ると、認識領域としてのヌシーは一部の住まいには残るが、上でみるような男女の場を分ける行動のしかたは消滅する。「おきな部屋」でヌシーとはかの部分とを分ける空間概念は、空間認識のしかただけに残る。

(iii) 外来者を応対する生活は、囲炉裏タオフィイをはさんだヌシーとガンフンで男女の行動の場を分けるものであった。

このような男女の行動の場を分ける行動のしかたは、囲炉裏タオフィイがフンファイに移ると、男女で場所を定めずにおこなわれるようになる。一部の住まいでは、半外部空間ホンノのベンチ状の椅子で応対するようになる。ヌシーとガンフンとの間に保たれてきた、上位の側を男の場とし下位の側を女の場とする行動のしかたは、変わっていったものと考えられる。

(iv) ナホンは就寝の場である。ナホンには蚊帳が吊られ布団が敷かれる。ナホンでは、デュワラの「依り代」のある柱サオデュワラに近い蚊帳に、家族のなかで年長の夫婦が眠る。またサオデュワラから遠い蚊帳には、若い世代の家族が眠る。成人前の子供は、年長の夫婦の近くの蚊帳で眠る。

先に述べている、ナホンのサオデュワラに近い側をホンロン（主となる場）、反対側をホンション（従となる場）とする二元的な空間概念と、就寝に現れるサオデュワラの位置と関係する、老はデュワラに近い上位の場で眠り、若はデュワラから離れた下位の場で眠る行動から読み取れる上位下位の空間概念とはかさなっている。

(v) ナホンは住まいのなかで唯一の外来者から隔離される空間である。ナホンは家族以外の他人には閉ざされている。他人は一家

図7 婚姻の儀礼における行動のしかた（部分）から読み取れる空間概念

の主人の許しがなければナホンに入ることにはできない。いっぽう「おきな部屋」には家人の許しを得て入ることにはできる。ナホンと「おきな部屋」との間には、隔離と開放という対立する概念を読み取ることができる。

ナホンと「おきな部屋」の囲炉裏タオファイとの間の場では、外来者の対応はおこなわれない。この領域にある認識領域ホンデュワラは、僧以外の外来者の侵入を拒む場である。これはタオファイがガンファイに移る住まいでも同じである。

以上より、ナホン、ナホンと「おきな部屋」の囲炉裏タオファイとの間、ガンフンの部分という三つの場には、外来者の対応に関する行動のしかたに違いがあることがわかる。住まいの奥まった位置ほど、外来者に対する隔離の程度が高くなるような空間概念が存在する。

4-2 非日常生活における行動のしかたと空間概念

人びとの空間に対する反応は、非日常におこなわれる儀礼に、より明確にあらわれる。

マンボン調査では、婚姻、葬送、産育、新築などの儀礼と年中行事¹⁶⁾での人びとの行動のしかたを調査している。これはプツァン(司祭)および複数の長老から聞き取ったものである。ここで知りえた儀礼および年中行事のおこなわれかたは、これまでに保たれ継承されてきた形態を留める住まいでのものである。しかし、これはいくぶん形を変えながらも、現在も多くの住まいに継承されている。

以下に儀礼における人びとの行動のしかたから読み取ることができる空間概念を述べる。

(1) 婚姻の儀礼と空間概念(図7)

チンヒャ(婚姻)は、いくつかの段階に分かれている。それは、①女側の住まいでおこなわれるチンヒャクノイ(結婚の申し込みと小宴会、チンは食べる、ヒャクは酒を飲む、ノイは小さいの意)、②プツァンの住まいでおこなわれるキャンワンリ(結婚式の日選び、キャンは見る、ワンは日、リは良いの意)、③結婚式の前日に男側女側の住まいでおこなわれるパイデュワラ(デュワラに祈ること、パイは祈る意)、④女側の住まいでおこなわれるマムとモハン(マムはプツァンが幸福と仲良く

なることを祈って新郎新婦の手に木綿の白い糸を巻くこと、モハンは新郎新婦の友達の男女の集団を糸で囲むこと)を中心とする結婚式とチンハオ(宴会)、⑤スンビーノン(新婦の住まいで両方の親戚を紹介しあう、スンは知りあう、ビーノンは親戚の意)、⑥結婚式からおおよそ三日から一ヶ月のあとにおこなわれる新婦を迎えにいくハッパ(ハッは迎える、パは新婦)、⑦ハッパから二日後に新郎の住まいでおこなわれるスヘ(婿を見る小宴会、スを見る、ヘは新郎の意)などである。

これらの婚姻の儀礼での人びとの行動のしかたから読み取ることができる空間概念を以下に要約する。

(i) 女側の住まいでおこなわれる結婚の申し込みと小宴会チンヒャクノイ、プツァンの住まいでおこなわれる結婚式の日選びキャンワンリでは、ヌシーを上位の側タンヌー、反対側のガンフンを下位の側タンタイとする認識をもとに人びとは行動する。

チンヒャクノイは囲炉裏の周辺でおこなわれる。ヌシーには女側の祖父あるいは祖母が坐る。囲炉裏タオファイの周辺には結婚を申し込む男側の親戚、女側の両親などが坐る。申し込む男側の人びとはヌシーには坐らない。キャンワンリでは、ヌシーにはプツァンが坐り、依頼者はタオファイの周辺に位置する。

チンヒャクノイでもキャンワンリでも、ヌシーをその他のタオファイの周辺とは違った場と認識して人びとは行動する。

(ii) 結婚の儀式は、女側の住まいのナホンでおこなわれる。日常的に就寝の場であるナホンは、非日常の儀礼の場に転換する。

ナホンの中央には、茹でた雄鳥と雌鳥をふくんだ料理をのいた卓を前にプツァンが坐り、サオデュワラに近い側ホンロンには花婿側の友達が、反対側のホンションには花嫁側の友達が位置する。

デュワラの「依り代」のある柱サオデュワラとの関係からナホンの内部を主従の場に分ける空間概念は、結婚の儀式での人びとの行動にあらわれる。ここから見いだされるのは、ナホンの内部のホンロンを男に、ホンションを女に結びつける空間概念である。

(iii) 結婚式の後のチンハオ(宴会)は、「おきな部屋」とナホンとでおこなわれる。チンハオでは、ヌシーには新郎新婦の祖父母と両親とが坐る。また上位の側タンヌーとホンデュワラには年寄り

図8 産育の行動のしかた (部分) から読み取れる空間概念

が坐る。若者は下位の側タンタイのガンフンに坐る。

ヌシーとガンフン、「おおきな部屋」のホンデウワラとその他の場とのあいだには、それぞれ二つの場を違ったものとする老若に結びつく空間概念が読みとれる。

宴会の場面では、男の場と女の場とは、タンヌーとタンタイで分かれることはない。しかし男の卓と女の卓は分けられる。

(iv) バイデウワラでは、結婚式の前日に男側の住まいと女側の住まいのサオデウワラの前のホンデウワラで、両親がデウワラに祈る。これはデウワラに、結婚式でナホンに家族の他の外来者が入ることの許しを得るためにおこなわれる。また一部の住まいでの聞き取りによると、家にはピーフン (精霊) がいてナホンで休むとされる。バイデウワラでは、ピーフンを驚かさなようにと祈るという。

このような人びとの精霊に対する感覚は、相当の聞き取りを重ねてもなかなか理解は困難である。しかし、これらの行動からは、人びとがナホンを「おおきな部屋」とは違った空間と認識していると、推測することができる。またホンデウワラを「おおきな部屋」のほかの部分とは違った場として行動していることがわかる。

(2) 葬送の儀礼と空間概念

葬送グンダイ (グンは人、ダイは亡くなるの意) のおこなわれかたは、ダイリ (正常な死、リは良いの意) の場合とダイツァまたはダイフン (非正常な死、ツァ、フンは良くないの意) の場合とでは違っている¹⁷⁾。

正常な死ダイリの場合、葬送は、①アプナム (生きているうちに体を洗う)、②トワイホ (民族衣装に着替えさせる)、③ウククワン (ムラの全戸に亡くなったことを知らせる、ウツは通知、クンは人、ワンはムラの意)、④棺をデウワラの下 (ホンデウワラ) に置く、⑤スツタン (経を読む)、⑥ハンクンタイ (出棺、ハンは担ぐ、クンタイは亡くなった人の意)、⑦ソクンクンタイ (棺を墓に運ぶ、ソクは送る)、⑧棺を埋める、⑨墓から帰ってするボンマンアナムン (ボンマンは戻る、アナムンは水をかけるの意)、⑩モハン (プツァンや僧が棺を担いだ人・親戚の手に木綿の白い糸を巻くこと) の順におこなわれる。

葬送の儀礼のおこなわれかたから得られる空間概念は次のようである。

(i) 集落の内側と外側での死は違ったものとして扱われる。また住まいの内部と外部での死も違ったものとして扱われる。正常な死とされるのは、住まいの中で亡くなった場合だけである。これより、集落の内部と外部、住まいの内部と外部は異なる場として認識されていることがわかる。

住まいを内部と外部とに分ける認識のしかたは、墓から帰ってするボンマンアナムンにも現われる。墓から帰るとザウジョ (角のような形をした植物、ジョは角) を入れた水をかけ住まいの内部に入る。

(ii) 遺体は棺におさめてホンデウワラに安置される。スツタンでは棺の前で僧ファピロンと司祭プツァンとが経を読む。葬送の儀

礼で、死者の魂は現世に留まってホンデウワラに宿るものと考えられている。

「おおきな部屋」のなかでホンデウワラを特別な場とする認識のしかたは、葬送の儀礼での行動のしかたに顕著にあらわれる。

(3) 産育 (出産) にともなう儀礼と空間概念 (図8)

出産 (ミエあるいはゴアル) の場合は、「おおきな部屋」の出入り口の戸の背後か露台ヌーツァンである。ホンデウワラとナホンで出産することは禁忌である。

ダイ・リヤム族は、出産を不浄なものと考えている。出産とその後の行動は、住まいの外部あるいは外部に近い場でおこなわれるものであり、デウワラの「依り代」のあるホンデウワラとカナホンから遠い場でおこなわれる。出産と産後の人びとの行動には、住まいの奥側に「浄」という概念を、手前の側に「不浄」という概念をあてはめてみると、ホンデウワラと住まいの奥まった部屋ナホンを「浄」な場、反対側の場を「不浄」な場とする空間概念が存在している、と考えることができる。しかしダイ・リヤム族は、浄・不浄をあらわす言葉をもたない。

ダイ・リヤム族は、死後に霊魂が各種の鬼魂に変わって、人びとにおおきな影響力や危害を加えると考えている¹⁸⁾。人びとは、出産にともない住まいの内部に鬼魂が入るのを恐れる観念をもつ。住まいに鬼魂が入ることを防ぐために呪標ターレオハビョウは、住まいや屋敷地の入り口に吊るされる。これは住まいの内部と外部とを分ける認識のしかたと結びついている。ダイ・リヤム族は、タンナ (タンは側、ナは内の意)、タンノ (ノは外の意) という住まいの内部と外部を分ける認識語彙をもつ。これより住まいには、外壁を境界にして内部と外部とを分ける空間概念が存在していることがわかる。

5 本稿で得られた結果

本稿では、ダイ・リヤム族の住まいをつくりだしている空間的な秩序とその展開を、日常的・非日常的な人びとの空間認識のしかたおよび行動のしかたの共時的な比較から追究しようとした。

事例的に調査したマンボン (芒蚌) の住まいのしめす傾向をもとにして得られた結果は、次のようである。

(i) これまでに継承されてきた住まいの居住面の構成は、調査住居の居住面の中心に置かれる「おおきな部屋」とこれとは分節するナホンの部分の構成として保たれている。とはいうものの、半外部空間が住まいの内部に取り込まれる、囲炉裏タオファイおよびその周辺が「おおきな部屋」からフンファイとして分節するような展開が認められる。これより炊事調理の場および食事の場となる部分から、居住面の構成が変わっていつていることが推測できる。

(ii) 囲炉裏タオファイをはさんで対置するふたつの認識領域ヌシーとガンフンとの間には、上位の側と下位の側という二元的に対立する空間概念が存在している。これは集落の山側ホーワンを上位の側タンヌー、山とは反対の側ハンワンを下位の側タンタイとする空間概念とかなっている。ヌシーは「おおきな部屋」で最も上位の場と認識されている。

この上位の場と下位の場という空間概念は、すべての調査住居に消滅せずに受けつがれている。それは囲炉裏タオファイのある部分を下位の側タンタイとするものである。どのような住まいでも「おおきな部屋」は上位の側にあり、囲炉裏タオファイのあるフンファ

イは下位の側に位置している。

(iii) ダイ・リヤム族の住まいには家族の守護霊デュワラが存在する。「おおきな部屋」およびナホンで人びとは、デュワラの「依り代」のある柱サオデュワラに近い場を主なる場、それとは反対側を従なる場と認識して行動している。またサオデュワラの前の場ホンデュワラは、人びとの信仰の行動によって意味づけられる特別な場である。調査住居のすべてにサオデュワラはある。しかしホンデュワラは一部の住まいでは消滅している。

集落の山側を上位、反対側を下位とする空間概念と家の守護霊デュワラに関する主従の空間概念とは重層するように存在する。

(iv) 住まいはおおきく三つの部分に分けて認識されている。半外部空間を外、「おおきな部屋」を中心、ホンノを奥とする空間概念は、それぞれの部分での外来者に対する隔離の程度に現れる。また、この空間概念は、住まいの奥まった場を「浄」な場、住まいの手前の側を「不浄」な場とする出産にともなう人びとの非日常的生活での行動に現れている。

(v) 「おおきな部屋」を住まいの中心に位置づける空間認識のしかたは続いて保たれている。受け継がれてきた日常的生活における行動は、「おおきな部屋」の囲炉裏タオフィアの周辺でおこなわれていたものと推測できるのだが、調査住居には「おおきな部屋」から食事、炊事調理などの日常的生活の行動の場を分化する展開が認められる。いっぽう、すべての調査住居で休息およびくつろぎ、外来者の応対は「おおきな部屋」でおこなわれている。しかし、これまでに休息およびくつろぎの生活と外来者を応対する生活に継承されてきた、上位の場に男を下位の場に女を結びつける行動のしかたは変わりつつある、と考えられる。

食事生活、炊事調理の生活と外来者を応対する生活とを分ける概念の形成は進んでいるものと考えられる。家族にとってウチ向きの生活とソト向きの生活という対立する生活概念が新たに生じているものと推測できる。それは調査住居で近年に進んだ居住面の構成の展開に現れている。

「おおきな部屋」のタオフィアの周辺を中心におこなわれていたとみられる、日常的生活における人びとの行動のしかたは、変わりつつある。また「おおきな部屋」に継承されてきた空間概念は、空間認識には保たれていても、人びとの日常的生活における行動のしかたから変わりつつある。

(vi) 非日常的生活における人びとの行動のしかたには、住まいをつくりだしている空間概念が鮮明に現れる。なかでも婚姻の儀礼と葬送の儀礼におけるいくつかの場面には、ヌシーを「おおきな部屋」のなかで最も上位の特別な場とする行動のしかた、ヌシーを上位の側、ガンフンを下位の側とする行動のしかたが現れる。またデュワラの「依り代」のあるホンデュワラを他の部分とは違った場とする行動のしかたが現れる。ヌシーとガンフン、「おおきな部屋」のホンデュワラとその他の場との間には、それぞれ老若と男女に結びつく空間概念が読みとれる。

(vii) 内部と外部とを分ける空間概念は、住まいにも集落にも存在する。この二元的に対立する空間概念は、葬送の儀礼などの非日常的生活における人びとの行動に現れる。また鬼魂を恐れる観念は、住まいの内部と外部とを分ける認識と結びついている。

以上よりみて、調査住居に受けつがれ保たれてきた住まいをつく

りだす空間的な秩序は変化しつつあると考えられる。それは日常的生活における人びとの空間認識のしかたや行動のしかたなどの空間に対する反応のしかたの変化に現われている。しかし、非日常的生活での空間認識のしかたおよび行動のしかたは、継承されてきたものとおおきくは変わらずに現在も保たれている。

ダイ・リヤム族の住まいをつくりだしている空間的な秩序は、日常的生活の側面では変化しつつあるのだが、非日常的生活の側面に継承され、より鮮明に現れている、と考えることができる。

注および引用文献

1) ダイ族の支族のひとつ。ダイ・リヤム族は、これまでダイ・ヌー族と同一の民族と考えられているのだが、既研究(注9)では、孟連県のダイ・リヤム族はひとつの異なる支族と判断できる可能性がある、との見方がしめされている。

2) 行為、身体動作、床面・生活財でしつらえられる場をあわせる概念。

3) 大河直躬：住まいの人類学(イメージ・リーディング叢書、平凡社、1986 Richard Zgusta: Dwelling Space in Eastern Asia (東南アジアにおける住居空間)、大阪外国語大学学術研究双書4、1991.3 など

4) これまでにおこなった高床系の住まいに居住する少数民族のフィールドワークは、ダイ・ルー族(1993年から2000年)、ハニ族(1995年、1996年)、ダイ・リヤム族(2000年、2001年)、ラフ・ナー族(2001年)、ワ族(2000年、2001年)などである。

5) 塩谷壽翁・沖田富美子：住生活のしくみを支配する文化的な枠組み西双版纳のバーン・チャ(曼乍)の事例から ダイ・ルー族の住生活の伝統と変容、日本建築学会計画系論文集 第508号、105-112、1998.6

6) 住まいの平面的構成、住生活財・生活装置、日常的生活および非日常的生活における行動のしかた、住まいの各部の呼び名、空間の認識のしかたをあらわす語彙、などを実測、観察、聞き取りにより調査。

調査は2000年9月と2001年9月におこなっている。筆者らのほか、2000年の調査には上田博之(大阪市立大学)と松尾有平(長崎総合科学大学)が、2001年の調査には松尾有平が参加している。

ダイ語の発音と意味は、ダイ語―漢語、漢語―日本語の通訳を介して聞き取っている。なお複数のインフォーマントに聞き取りを繰り返すことによって、できるかぎり正確を期すようにつとめた。

7) マンボンのブツァン(司祭)・ポーシャンイーハン、ムラの会計・ミーツーレンハンからの聞き取り。

8) 日常的な行動(就寝、休息およびくつろぎ、外来者の応対、炊事調理など)がおこなわれる高床の上階の床面。

9) 上田博之：中国雲南省孟連県のダイ・リヤム族の伝統的住居の空間構造、日本建築学会計画系論文集 第518号、97-103、1999.4

10) 注7に同じ。

11) 日常的には食事、休息およびくつろぎ、炊事調理、外来者の応対などがおこなわれる居住面の中心におかれる部屋。この部屋には呼び名がないので、本稿では仮に「おおきな部屋」と呼ぶ。

12) 注7に同じ。

13) ダイ族は精霊の存在を信じている。精霊に対する信仰は人びとの暮らしとつよく関っている。(覃 光弘等編著 伊藤清司・監訳、林雅子・訳：中国少数民族の信仰と習慣(下巻)、第一書房(発行)、402-405、1993、による)。

サオデュワラの「おおきな部屋」側には、人びとがデュワラがいると信じている「依り代」がある。「依り代」は木でできた簡素なものである。

14) たとえば住まいを新築してまず最初におこなうのは、囲炉裏に五徳をすえる儀式である。一家の主人はもとの住まいから五徳を移して、ブツァン(司祭)と二人の長老が幸福を願って祈った後に据える。このとき囲炉裏にビーファイ(ビーは精霊、ファイは火の意)がくると信じられている。その後に一家の主人は元の住まいの囲炉裏から火を移す。

15) 既研究(注9)では、本稿でいうホンノ、ガンフン、ナホンのあいだの認識のしかたを、相対的な序列概念として説明している。

16) マンボンでおこなわれる年中行事のうち、おもなものは、ハウァッサ(開門節)、オウァッサ(開門節)、メーワン(メーは整理、ワンはムラの意)、シンウォロン(黄牛祭り、シンは祭り、ウォロンは黄牛の意)などである。

17) 正常な死ダイリは、病気、老衰で家で亡くなる場合だけである。妊婦は家で亡くなっても非正常死とされる。自殺と水掛け祭りの間に亡くなった場合も非正常死とされる。ムラの中での死でも、家の外で亡くなった場合は非正常死とされ、遺体は家には入れられない。ムラの外で亡くなった場合は、ムラの中に遺体は入れられない。

18) 注13)の引用文献による。

(2002年10月30日原稿受理、2003年4月23日採用決定)